

志津川湾

(しづがわん)

位置：北緯38度40分、東経141度30分／標高：0m／面積：5793 ha／湿地のタイプ：B: 海洋の潮下帯域(水中植生)／保護の制度：国立公園海域公園地区／所在地：宮城県南三陸町／登録：2018年10月／国際登録基準：1、2、3、4、6

湿地のタイプ：藻場



南東から見た志津川湾



岸辺で休むコクガン



カキの養殖のようす

湿地の概要：

志津川湾は北太平洋に面する三陸海岸の南部に位置している。栄養分を多く含んだ親潮(寒流)、と南方からの暖かい海水を運ぶ黒潮(暖流)、津軽暖流(暖流)の3つの海流の影響をバランスよく受ける環境である。そのため、冷たい海を代表するマコンブと暖かい海を代表するアラムの両方がみられる貴重な藻場が広がっている。また、湾内には荒島(あれしま)や椿島などの大小の島々が散在し、海岸沿いには岩礁帯や砂泥地、干潟も存在している。

国の天然記念物、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に掲載されているコクガンが毎年100羽以上越冬する。越冬するためには、餌となるアマモ等があること、休憩場所となる岩礁帯が必要である。さらには、魚類等を餌にしている猛禽類のオジロワシ、オオワシも越冬に訪れる。

志津川港から約4kmの海上にある椿島周辺には、わが国を代表する海藻藻場をモニタリングすることを目的とした調査(環境省モニタリングサイト1000)の調査地点が設置されており、2008年から継続した調査が行われている。2011年の東日本大震災の津波により、藻場の状態は大きく変化したが、現在は回復してきている。

さまざまなタイプの藻場：

藻場は、海藻の森や海草の草原とも呼ばれ、湾内には、海藻で構成されるコンブ場、アラム場、ガラモ場、海草で構成され

るアマモ場の4つのタイプの藻場が存在する。アマモ場には絶滅危惧種を含む、アマモ、スゲアマモ、タチアマモ、スガモの4種が生育するなど、全部で200種以上の海草・海藻類が確認されている。このような藻場は世界的にも希少である。海草と海藻類以外にも550種以上の海生生物の餌場や生息地となり、海洋の生物多様性を支えている。

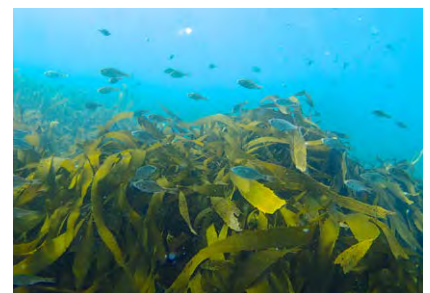
持続可能な養殖：

志津川湾は資源に恵まれた海で、水産業は南三陸町の基幹産業である。湾内では古くからカキ・ワカメ・ギンザケ等の養殖が行われて、人々の生活を支える基盤となっている。持続可能で適切に管理された養殖業を目指しており、水産養殖管理協議会(ASC)の養殖水産物に対するエコラベルであるASC認証を受けたカキも生産されている。

自然とのふれあいの拠点：

三陸復興国立公園 南三陸 海のビジターセンターが整備されている。ラムサール条約湿地を含む三陸復興国立公園や周辺の自然情報を発信し、カヤック等の自然体験プログラムなど、自然とふれあう機会を提供している。

東日本大震災の前は、戸倉地区に南三陸町自然環境活用センターが整備され、教育プログラムや人材育成が行われていた。津波の被害を受けて全壊した後は、町役場内で、ネイチャーセンター準備室として生



藻場(アラム場)

物相調査等の各種研究や環境教育活動等を行いながら、センター再建に向けて活動している。

●関係自治体

南三陸町役場 Tel: 0226-46-2600

